

狸 16 緋の衣を纏った狸 = = = 猪・鹿・狸より

三河の伊良胡岬の丁度中央頃、田原の町からは南に当たって聳えている山を、御津（おっと）〔越戸〕の大山（おおやま）と言うて、畑中では、第一の高山であった。この山の久保の谷には、昔から悪い狸が棲んでいるとはもっぱら言い伝えていた。まだ古い出来事ではないと聞いたが、山の南側に当たる福江村のものが、朝早く山を越して仕事に出ると、きまって行方が判らなくなる。それが村のものだけではない、旅商人などで日を暮らして通りかかったものが皆目知れなくなったこともある。ある時は葬式帰りの和尚と小坊主二人が、日暮れに山に掛かったまま知れなくなった。それがある時、行方の判らなくなったものの身に付けていた手拭が、血に染まって山の途中の木の枝に引っ掛かっていたことから、何か山の怪の禍かも知れぬと言うことになった。それで村中評議の上、山狩りをする事になって、その中の一隊が久保の山深く入り込むと、一ヶ所まだ誰も知らぬ岩窟があって、その奥に大きな狸の穴を発見した。しかもその手前に、かつて行方を失ったものの履物が片方落ちていた。いよいよこの穴が怪しいとなって、穴の周囲に矢来を結っておいて掘りにかかった。おそろしく深い穴で、三日続けて掘って、やっと最後の穴の奥へ掘り当てたと言う。中は広さ八畳敷ほどもあって、その奥にさらに一段高い処がある。見ると緋の衣を纏った大狸が、人々の立ち騒ぐのを尻目にかけて、端然と坐っていたそうである。村のものも一度は驚いたが、こいつ遁がすものかと、いずれも寄ってたかって撲殺した。しかし狸は観念した様子で、すこしも荒れ狂うことはなかったと言う。傍らにはそれまで狸の餌食になった人々の、衣類や骨の類が堆く積んであった。その時狸の着けていた緋の衣は、葬式帰りの和尚のものであったと言うが、それ以来久保の山には、何の禍もなくなったと言う。この話は豊橋の町のある婆さんから聴いたが、本人は土地のものから直接聞いたと言うていた。緋の衣は着ていなかったが、狸が人を殺して喰った話は、まだ他にも聴いたことがある。自分らが子供の頃など、狐と狸と何れが恐ろしいかなどと比較論をやって、狸は人を殺して喰うから怖ろしい、狐はただ化かしたり憑くだけだなどと言うたものである。その時分聞いた話で、八名郡鳥原（とりはら）の山でも、狸の餌食になったものがあつたともっぱら噂した。

狸が人を取り喰らった話の一方には、女を誘拐して女房にしていた話がある。宝飯郡八幡村千両（ちぎり）の出来事であった。娘が家出して行方が知れなくて、方々探していると、近所の病人に狸が憑いて、俺が連れて行って女房にしていると言う。場所はこれこれと、村の西北に聳えている本宮山の裏山にあることを漏らしたので、初めて山探しをして見ると、果たしてえらい険しい岩の陰にいたそうである。そこは雨風など自然に防ぐように出来ている場所だった

と言う。後になって娘に様子を問い訊すと、狸だか何だか知らぬが、山の木の  
実や果物の類を、ときおり運んで来て食わしてくれたと語ったそうである。そ  
の娘は平生から、少し足りぬような様子があったと言う。この話は自分が十二、  
三の頃、隣村の木挽きから聴いた話である。